

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：28002

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11172

研究課題名（和文）島嶼地区の高齢女性とともに探る人口減少の看護対策 島での子育て文化に学ぶ

研究課題名（英文）Exploring Nursing Strategies for Addressing Population Decline with Older Women in Island Regions: Learning from Island-Based Child-Rearing Cultures

研究代表者

野口 美和子 (Noguchi, Miwako)

沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・名誉教授

研究者番号：10070682

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）： 目的は、島嶼において、子産み・子育てをフルスペックに体験した高齢女性を研究協力者とし、子育て文化の中核的要素を導き、子を産み育てる営みを支え合うための対策を看護の立場から提案することであった。

子育て文化の中核的要素は、“食べさせる”“安全を見守る”“地縁・血縁の地域で育てる”“関わって楽しむ”“学びを語り継ぐ”“社会や価値の変化を受け止める”“支えあう感謝や生きる希望につなぐ”“専門職と地域の多様性との融合で子育てをする”が導かれた。看護の立場から、高齢者が子育て支援に参画することは、高齢者の生きがいだけでなく、子どもにとって“共感する心”が育まれることを提案する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、高齢者の子育て文化を明らかにし、高齢者と子どもの交流を通して、子どもが自己と他者の能力の違いを客観視でき、自分から他者を助けようとする共感力が生まれ、子を産み育てる営みを相互扶助で支え合うことを示唆したことである。

本研究の社会的意義は、子育ては親や専門職の子育てだけでは賅えないことがあるとし、親や専門職に加え、地縁や血縁の高齢者を積極的に参画させる社会サービスを推進する重要性を示唆したことである。

研究成果の概要（英文）： This research collaborated with older women living in island communities who possess a wealth of experience in childbirth and child-rearing in order to identify the core elements of their child-rearing culture and to develop proposals for nursing strategies aimed at supporting these practices.

The core elements of child-rearing identified were as follows: providing nourishment; ensuring safety; nurturing of children within communities based on local and familial bonds; actively participating in and deriving enjoyment from community engagement; passing on oral traditions; adapting to social changes and changing values; linking mutual support and gratitude to hopes for the future; and child-rearing practices that integrate professional expertise with community diversity. From a nursing perspective, it was suggested that the active participation of older people in child-rearing not only provides them with purpose but also helps to instill children with a sense of empathy and compassion.

研究分野：老年看護学

キーワード：島嶼 高齢女性 子産み・子育て 地域文化

1. 研究開始当初の背景

1) 本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

人口減少への対応は、我が国の喫緊の課題である。その対策として、経済活動の活性化による人口対策、特に若年者の流入促進や流出防止という社会政策的、表層的対策、つまり人口の奪い合いが考えられている。しかし人口減少の人的、根本的対策は、子を産み育てる営みを支え合うことではないかと考える。出生率に影響を及ぼす要因として、母親の就労、若年者の雇用の安定、長時間労働、職住分離、母親に子育て負担が集中しているなどの社会的要因が関係していると言われている。少子化が進行する我が国にあって、減少したとはいえ島嶼県沖縄の離島では比較的高い出生率を保持している。2016年の都道府県別出生率では、最も高いのが沖縄県(出生率:1.95)であり、市町村別でみると1位:久米島町、2位:宮古島市であり、いずれも沖縄県の離島である。しかし沖縄(あるいは離島)では、雇用状況は非正規雇用が多く不安定で、収入は全国で一番低い。また、沖縄は9割近くが核家族であり三世同居による支援は少ないことから、沖縄の離島は「保育に欠ける」様態と考えられている。一方、沖縄では、若年出産率は高く(沖縄2.6、全国平均1.1)、40歳以上の高齢出産率も高いという課題もある(沖縄0.2、全国平均0.1)(厚生労働省平成28年度人口動態調査)。経済的に豊かとはいえ、しかも「保育に欠ける」沖縄の離島で高い出生率を維持している背景は何か?根ヶ山は、島嶼地区に息づく子育て文化、つまり、子どもを大切にす文化、母親以外の者による保育支援(アロマザリング)の存在を指摘している(根ヶ山, 2011, 2012)。このような子育て支援システムであるアロマザリング以外にも、子育てに先行する子産みを支援する文化もあると考えられるが、十分に検討されていない。我が国の抱えている少子化・人口減少に歯止めをかけるには、経済活動の活性化による人口対策とは異なる視点も必要と考える。高齢女性は、幼少期は子として育てられた体験、長じて子育て支援(子守)体験、次に子産み・子育て体験、そして祖母となって子産み・子育てを支援する体験を持っている。つまり、フルスペックの子産み・子育てに関わる体験者であり、また、その時代的变化を実感してきた者でもある。そのような高齢女性の子産み・子育ての文化的有り様を研究者はともに学び検討する価値があると考え。超高齢社会において、高齢者は「支援の対象」から「社会を支える者」として期待されている。社会に貢献することは、主観的幸福感、生活満足度、抑うつ状態、介護予防に効果があるとされている。柴田(2005)は、社会に貢献するということは、就労だけでなく家事や子育て等も含まれるとしている。性差や性役割を社会から意識させられて生きてきた高齢女性は、家事や子育てによって社会を支えてきた。そのような高齢女性にとっても、子産み・子育てを支援することによって社会を支える者となれると考える。子産みから子育てまでの当事者と関わる看護職者の立場から、島で生きられた子産み・子育て文化を学び、島嶼の高齢女性とともに人口減少の対策を探り、提案することには意義があると考え。

2) これまでの研究成果と本研究の着想

我々は、2009年から学士課程における島嶼看護学教育(課題番号21592922)、2012年から島嶼看護学教育内容の体系化に関する研究(課題番号24593456)を進めてきた。これらは、これまでに実践してきた島嶼看護研究(含実践報告)を基に、島嶼看護教育の内容を学士課程、博士前期課程、博士後期課程のカリキュラムを提示し、島嶼看護学教育の普及に貢献することを目指すものであった。それらの研究プロセスで、子産み、子育てをテーマにした研究が極めて少ないことであった。我が国の直面する課題である“人口減少対策”の緊急さ、重大さに鑑みて、我々の研究が大きな欠陥を持っていることに気づかされた。上記の反省から、我が国の直面する人口減少に対して、高出生率を維持している離島(宮古島市・久米島町)で、看護の立場から子産み・子育てとその支援の当事者であった高齢女性と共に“人口減少対策を学ぶ”こととした。

3) 関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ

我が国は、少子化による人口減少対策として、2010年から「子ども・子育てビジョン」で「妊娠・出産・子育ての希望が実現できる社会」をめざしている。その内容は、経済的支援、保育の場の確保、医療サービスの拡充などで、子産み・子育てのフルスペックな体験を持つ高齢女性を地域資源として活かす内容はみつからない。また、社会全体で子育てを支援するための研究には、母子保健推進員の活動の拡大と強化の必要性(西平,2015)、ソーシャル・キャピタルの醸成の必要性(杉田,2014)など、子育てを社会全体で支える支援の必要性に留まっている。高齢女性の語りから捉えた子育て(孫育て)支援に関する研究も散見されるが、その内容は、世代間交流によって、高齢者のQOLが向上する報告(田中,2018)であり、高齢女性の持つ子産み・子育て経験を活かしているものではなかった。離島に関する研究では、伊吹島の別火生活を送った女性の思いがあり、古くから受け継がれている風習を守ることで、女性として誇りを持って生きていく(松本,2018)という文化を肯定的に受け入れている報告があった。しかし、沖縄の離島の子育てに関する先行研究は、若年妊婦の育児の課題(賀数,2015,2009)、離島の母親への子育て支援の必要性(玉城,2015,2007)など、エビデンスに基づいた科学的育児からの批判的視点であった。このように、高

齢女性の持つ文化的な子産み・子育ての有り様を現代の子産み・子育てに地域資源として活かす視点の研究は、重要であると考えらる。

2. 研究の目的

人口減少へ対応するための社会政策の多くは、経済活動の活性化による人口対策であり、人口の奪い合いである。本研究では、出生率を維持している島嶼地区があることに着目し、島嶼に受け継がれてきた子産み・子育て文化を生きてきた高齢女性の体験から子育て文化の中核的要素を導くことにより、現代の人口減少という喫緊の課題への人間的で根本的で文化的な対策、つまり人口を奪い合うのではなく子を産み育てる営みを支え合うための対策を看護の立場から提案したい。

3. 研究の方法

研究デザインは、質的記述的研究である。

1) 対象地域の概要

日本本土復帰前で米軍統治下にあった沖縄県では児童福祉法が適用されず、地域の篤志家やキリスト教関係者らによる保育の復興が1947年にはじまった。1953年に琉球政府による児童福祉法が交付、1964年に保健所建設費に初の日政援助が導入された以降、公立保育所が整備された。1972年の本土復帰とともに保育所が急増した。

対象地域は、沖縄県でも出生率の高い2島(A島、B島)であった。

A島は、人口6,810人、合計特殊出生率2.07(2013~2017年)、高齢化率29.9%、子ども関連の施設は保育所4、幼稚園2、小学校6、中学校2、高校1であった。基幹産業はダイビングの観光業、サトウキビ農業、酒造業であり、島外との交通網は、主島との間に1日8往復の空路(片道約35分)と1日1~2往復の海路(片道約3時間)があった。A島の保育所開設は、1969年であった。

B島は、人口1,050人、合計特殊出生率1.91(2013~2017年)、高齢化率30.3%、子ども関連の施設は保育所、幼稚園、小学校、中学校が各1か所ずつあるが、高校はない。基幹産業はサトウキビ農業・製糖、肉牛の畜産業であり、島外との交通網は、主島との間に1日2往復の空路(片道約20分)と1日1往復の海路(片道約2時間)があった。B島の保育所開設は、1979年であった。

2) 研究協力者

研究協力者は、島で子育ての体験を持つ高齢女性23名であり、保育の専門職であった高齢女性を含んでいた(A島11名、B島12名、うち、保育の専門職を各島1名含む)。

3) データ収集・分析の方法

データ収集は、半構造化したインタビューを実施した。面接内容は、子どもとして育てられた体験、子育ての体験、子育てを支援した体験の語りであった。3つの面接内容の項目ごとに、質的帰納的に分析した。そして、項目ごとのカテゴリーを「高齢女性の体験にみる子育て文化とは何か」の視点で整理し、子育て文化の中核的要素を導いた。

はキーセンテンス、《 》はサブカテゴリー、【 】はカテゴリー、“ ”は子育て文化として、表記した。

4) 倫理的配慮

研究協力予定者に対し、研究の趣旨を伝え、参加は自由意思に基づくこと、個人情報を守られることなどを文書と口頭で説明し、全員から同意を得た。本研究は、研究者が所属する大学の研究倫理審査委員会において承認を得て実施した(承認番号19010)。

4. 研究成果

1) 高齢女性の体験

(1) 子どもとして育てられた体験

子どもとして育てられた体験には、【貧しさのなかで食べ物優先の暮らし】【子ども同士の遊びと見守り合い】【親の後ろ姿に学ぶ道徳心】があった。

(2) 子育ての体験

子育ての体験には、【産後以外は子育てに必要な生活費や教育費を稼ぐために働きづめの暮らし】【妊娠中の家族の支援ならびに分娩の専門職の介入はなく、命を張ってのお産】【取り上げ婆さんや家族の経験・知恵によるアドバイスや協力で子産み子育てする安心感】【守姉(親族などの姉による子守り)から愛情を注がれ子育てを補い長い付き合いの形成】【人や物に恵まれない環境であっても、創意工夫や我慢の子育て】【子どもは地域で見守り合って育てる風土】【時代や親の子育てに影響を受けた子育てへの迷いと反省】があった。

(3) 子育てを支援した体験

子育てを支援した体験には、【島外の孫や体験学習で来島した子どもたちに食事や地域文化活動を伝える楽しみ】【同居の孫や地域の子どもたちみんなを見守りながら遊び喜ぶ暮らし】【子や孫と生計や介護で支え合う暮らしへの感謝】【少子化や価値観の変化により、子育てに関われない寂しさ】【子育てを見守りつつ、自らの子育てを点検し生きる希望】【思い出や「良かった」と思える子育て体験を語る引き継ぎ】【多世代、異なる状況・年齢の子もたちの遊び・交流を求め保育の専門職によるチャレンジ】があった。

(4) 事例にみる高齢女性の体験

D氏の例

90代 農業を営みながら5人の子どもを産み育て、現在一人暮らし

子どもとして育てられた体験では、戦後生まれでどのようにして生まれたのかは覚えていないし、聞いたことがないが、子どもの頃は、近所の子どもたちと泥んこ遊びをしていたと語り、《子ども同士で遊び学び見守りあった》という【子ども同士の遊びと見守り合い】があった。

子育ての体験では、産後1ヵ月を過ぎると、畑に出かけるようになり、乳児の母乳時間にあわせて、自宅に戻ってきた。日中は働き、夜には添い寝したが、子どもと遊んだ思い出はない。子どもを高校・大学に進学させるのにお金を稼ぐ必要があるが、当時の島での仕事は農業だけだったのでいっぱい汗を流したと語り、《子育てに必要な生活費や教育費を稼ぐために畑仕事や内職など掛け持ちして働いた》という【産後以外は子育てに必要な生活費や教育費を稼ぐために働き詰めの暮らし】があった。

子育てを支援した体験では、島外で大学出たら、子どもたちは、(島には働き口もないから)もう帰ってこない。孫はみんな島外で暮らしているので、子育ての支援に関わる機会がない。子どもたちは子(孫)育てを頑張っていると思うが、「親は大変な思いをして子どもを育てるのよ」と励ますように子どもに言い聞かせている。島から大学まで進学させた苦勞は、こまごまと話さないが思いは伝えるようにしているし、子どもには伝わっていると思うと語り、《子育て世代にある子どもたちに自身の体験を伝え、子育てについて語り継いでいる》という【思い出や「良かった」と思える子育て体験を語る引き継ぎ】があった。

V氏の例

70代 保育の専門職で2人の子どもを産み育て、現在二人暮らし

子どもとして育てられた体験では、親が仕事で忙しくて、子育てに関われないのが当たり前の時代で「ゆいまーる(助け合い)」で親戚みんな畑仕事に行くので、子どもたちも一緒について行き、畑仕事をしている親の近くで子どもは集まって遊んでいたと語り、《子ども同士で遊び学び見守りあった》という【子ども同士の遊びと見守り合い】があった。

子育ての体験では、昼は保育園で勤めて夜は機織りをして稼ぎ、夫は家族を支えた。子どもと一緒に出勤することもあったが、早番、遅番があり、できない時には夫や親戚と調整しながらやった。私の子どもたちは、実家や地域の高齢者に、どこでもいっぱいかわいがられたので、気遣いがあり、とてもやさしい子どもに育っていると思うと語り、《保育園にも預けたが、親戚や地域の高齢者の愛情を注がれ育った》という【子どもは地域で見守り合って育てる風土】があった。

子育てを支援した体験では、保育の専門職だけでは、賄えないことがある。高齢者と子どもが接すると、自然に人情がでる、心のゆとりがでるので高齢者と過ごす子どもが情緒が安定すると思うし、高齢者と子どもは、たぶんでできないことは補うことができるので、その関わり合いが一番理想だと思う。統廃合して廃校になった場所を利用して放課後保育を高齢者と一緒にやりたいので、議員を通して何回も提案したが受け入れられなかったと語り、《子ども達と高齢者が交流し、補い合う地域づくりを諦めずに求め続ける》という【多世代、異なる状況・年齢の子ども達の遊び・交流を求める保育の専門職によるチャレンジ】があった。

2) 子育て文化の中核的要素(図1)

子育て文化の中核的要素は、高齢女性(全23例)の体験から導かれた、子どもとして育てられた体験3カテゴリー、子育ての体験7カテゴリー、子育てを支援した体験7カテゴリーを、高齢女性の体験にみる子育て文化とはどのようなものかという視点で整理した。

フルスペックの子産み・子育ての3つの体験から、子育て文化の中核的要素として、“食べさせる”“安全を見守る”“地縁・血縁の地域で育てる”“関わって楽しむ”“学びを語り継ぐ”が導かれた。子育てを支援した体験には、“社会や価値の変化を受け止める”“支え合う感謝や生きる希望につなぐ”“専門職と地域の多様な主体の協働で子育てを支える”が導かれた。

5. 考察

我々は、高齢者看護の立場から、子育てに関わるフルスペックの体験者であり、その時代的变化を実感してきた者でもある高齢女性、特に出生率が高く維持されてきた離島に住む高齢女性であることから、その持つ子育て文化を現代の子育てに地域資源として生かすことができるのではないかと考え、本研究に着手した。

少子化と表裏一体である高齢化が進む現代、高齢女性の語りから捉えた子育て(孫育て)支援に関する研究も散見されるが(田中,2018)、その内容は、世代間交流によって、高齢者のQOLが向上するというものであり、高齢者にとってのメリットが語られやすい傾向がある。本研究においても、子育てを支援した体験には、高齢者にとってのメリットが多く語られていた。

一方、保育の専門職であった高齢女性からは、高齢者と子どもが接すると、自然に人情がでる、心のゆとりがでるので高齢者と過ごす子どもが情緒が安定すると思う、高齢者と子供は多分、できないことは補うことができるのでその関わり合いが一番理想だと思う等の【多世代、異なる状況・年齢の子ども達の遊び・交流を求める保育の専門職によるチャレンジ】があり、子どもにとってのメリットも語られていた。

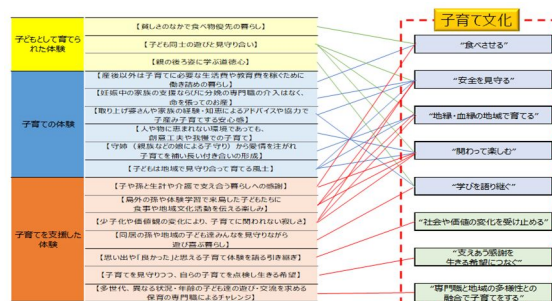


図1 高齢女性の体験にみる子育て文化

核家族化により家族以外の大人と接することが減っている今、高齢者にとってのメリットだけでなく、子どもにとってのよい効果を保育の専門職であった高齢女性は期待し、その実現のために、チャレンジしていたことが明らかになった。

本研究の結果は、過去の体験にみる子育て文化では、姑や実母などの血縁保育ネットワークと守姉や隣近所の子どもたち等の地縁保育ネットワークが重なり合い、補い合っていたことが示された。現在では、これら保育ネットワークから、祖父母を、そして、子どもの数の減少や進学率の高まりにより、お兄さん、お姉さんを排除し、母親・父親と保育所・幼稚園・学校が子育てを一手に担っている状況である。そのような保育状況のなかで、高齢女性は、社会や価値の変化を受け止め、支え合う感謝や希望につなぎ、保育の専門職であった高齢女性は、“専門職と地域の多様性との融合で子育てをする”という子育て文化の中核的要素を取り戻し、子どもにとっての良い効果の実現にチャレンジしていた。

生物学者のクロボトキン(2017)は、ダーウィンの生存競争説を基本とした進化論に異論を唱え、進化の一要素として相互扶助の存在を明らかにし相互扶助の源泉には、共感が欠かせないと報告している。また、人類学者の山極(2023)は、共感革命の存在とその重要性を提示している。そして、子どもの共感力を育むためには、「同じクラスで同じ年齢の子どもたちだけとつき合っていくのはよくない。身体能力の違う子どもたちと付き合わない他者との違いがわからない。子供の共感力を高めるには、もっと多様ななかかわりが必要になってくる。」と述べている。

つまり、高齢者と子ども、異なる年齢の子どもたちと遊び・交流を通して接することで、子どもは自己と他者の能力の違いを客観視でき、自分から他者を助けようとする共感力が育まれ、補い合うという相互扶助が可能になると考えられる。

地域で保育された体験と専門職としての体験を併せ持つ保育専門職であった高齢女性は、その体験と専門的観察能力によって、高齢者との交流や異なる年齢の子どもとの遊びを含む保育環境の有用性を理解できたのだと考えられた。

Bayley(1973)は、地域ケアを三段階に整理し、最も高い地域ケアとしてCare by the Community、すなわち、専門職と地域住民とのケアを位置づけている。

本研究でも、保育の専門職であった高齢女性は、【専門職と地域の多様性との融合で子育てをする】という子育て文化を活かすことで、高齢者だけでなく子供にとってもメリットがあることを示していた。すなわち、子育ては、知識・技術を持った専門職の子育てで賄えないことがあるとし、地域にある子育て文化への期待をしていたと言える。

このように、出生率が維持されている島嶼地区における子育て文化は、子どもにとっては共感力が育まれ、高齢者にとっては子育てに参加する役割の拡大が期待できることが示された。

看護の立場から子を産み育てる営みを支えあうための対策は、高齢者に子育て支援への積極的な参画の機会を社会サービスとして推進することを提案したい。

引用文献

- Bayley(1973). Mental Handicap and Community Care. Routledge & Kegan Paul.
- 根ヶ山光一(2012). アロマザリングの島の子どもたち 多良間島子別れフィールドノート, 新曜社.
- 賀数いづみ, 前田和子, 上田礼子, 安田由美, 仲宗根美佐子(2009). 沖縄県離島における若年母親の療育行動 一般母親との比較, 沖縄県立看護大学紀要, 10, 15-23.
- 賀数いづみ, 前田和子, 西平朋子(2015). 沖縄県における10代母親の現状とハイリスク者の特定, 沖縄県立看護大学紀要, 16, 49-61.
- Negayama.K(2011). Kowakare: a new perspective on the development of early mother-offspring relationship, Integr Psychol Behav Sci, 45(1), 86-99.
- 西平朋子, 吉川千恵子, 玉城清子(2015). 離島A島における子育て支援のための新たな地域づくり: 母子保健推進員の育成, 沖縄県立看護大学紀要, 16, 87-96.
- ピョートル クロボトキン(著), 大杉栄(翻訳)(2017). 新装 増補修訂版 相互扶助論, 同時代社.
- 柴田博(2005). サクセスフル・エイジングの条件(特集: 老年学テーマ: 生涯現役をささえるために), 桜美林シナジー: 桜美林大学大学院国際学研究ジャーナル, 4, 1-14.
- 杉田由加里, 石川麻衣(2014). ソーシャル・キャピタルの醸成に資する保健ボランティアの活動に対する保健師の関わり, 文化看護学会, 6(1), 1-11.
- 松本千佳, 佐々木睦子(2018). 伊吹島の出部屋で別火生活を送った女性の思い, 香川大学看護学雑誌, 22(1), 11-21.
- 玉城清子, 西平朋子, 吉川千恵子, 嘉陽田友香, 上田礼子(2015). 母親行動の発達プロセス A島居住の幼児を持つ母親の語りを通して, 沖縄県立看護大学紀要, 16, 63-75.
- 玉城清子, 上田礼子(2007). 若年母親の新生児に対する知覚と育児行動, 沖縄県立看護大学紀要, 8, 9-15.
- 田中直子, 齋藤泰子(2018). 世代間交流施設における利用者評価 高齢者と子育て世代の母親の語りから, 武蔵野大学看護学研究所紀要, 12, 21-29.
- 山極壽一(2023). 共感革命: 社交する人類の進化と未来, 河出新書.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野口美和子, 大湾明美, 山口初代, 田場由紀, 砂川ゆかり
2. 発表標題 高齢女性の体験に学ぶ沖縄県島嶼地区における子育て文化
3. 学会等名 日本ルーラルナーシング学会第18回学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 野口美和子, 大湾明美, 山口初代, 田場由紀, 砂川ゆかり
2. 発表標題 島嶼地区の高齢女性とともに探る人口減少への看護対策 島での子育て文化から学ぶ
3. 学会等名 文化看護学会第16回学術集会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大湾 明美 (Ohwan Akemi) (80185404)	沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・名誉教授 (28002)	
研究分担者	田場 由紀 (Taba Yuki) (30549027)	沖縄県立看護大学・看護学部・教授 (28002)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石垣 和子 (Ishigaki Kazuko) (80073089)	石川県立看護大学・看護学部・教授 (23302)	
研究分担者	吉川 千恵子 (Yoshikawa Chieko) (50326500)	沖縄県立看護大学・看護学部・研究員 (28002)	
研究分担者	盛島 幸子 (Morishima Sachiko) (10836604)	沖縄県立看護大学・看護学部・研究員 (28002)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山口 初代 (Yamaguchi Hatsuyo) (70647007)	沖縄県立看護大学・看護学部・准教授 (28002)	
研究協力者	砂川 ゆかり (Sunagawa Yukari) (00588824)	沖縄県立看護大学・看護学部・准教授 (28002)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------